

い顔だ。

「アツロウ？」

「よお。……さつきナオヤさんに誘われたんだ」

「ちよūdど見つけたから連れてきた。夕食は足りるだろう？」

「うん、それは平気。ゆつくりしていけよ、アツロウ。ほらあつちに座って。ナオヤも」

ノートを閉じて立ちあがった夕夜がキッチンに向かう。しばらくして、コートを脱いでリビングのソファに腰を下ろしたアツロウとナオヤの隣に、急須と湯呑みを載せた盆を持った夕夜が座った。

「ねえ何かおやつとか無かったっけ？ あ、羊羹切ろうか」

「すぐに夕食だろう。後にしろ」

「だつてせっかくアツロウが来たんだし」

「食べるなどは言っていない。食後にしておけ」

お構いなく、と口を挟む気にもなれなかった。言

いあう二人が楽しそうだったからだ。

(それにしても、あれは何だ?)
アツロウは思いきつて、先程から気になっていた

事を訊ねた。

「なあユーヤ、お前の頭のそれ、何なんだ？」

「えっ？ あつ……あの、その」

頭を指さされるまで忘れていたらしく、指摘した途端にあからさまに狼狽えた。いつもネコミミとからかっていたヘッドホンのワイヤーに髪と同じ色のフアーで作ったらしきカパーが付いている。確か立ちあがった彼のズボンの尻辺りからも同色の長いフアーが垂れていた。

猫耳、猫尻尾。そういうふうにはしか見えない。

予告しての訪問であればそれに合わせた何かの悪ふざけかとも思えた。しかしいきなり呼ばれたから夕夜はアツロウが来るなんて知らなかったはずだ。

「こういうコスプレが……趣味だったのか？」

秋葉原辺りへ行けば似たような連中は大勢いる。しかし彼がそんな趣味を持っていたのだろうか。親友の趣味なら受けいれなければとおそろのおそろの隣でナオヤが意地の悪い笑みを浮かべている。

「違う！ これは罰ゲームでやらされてるんだ！」
趣味、と言われた夕夜は慌てて否定した。誤魔化しているようには見えない。

「ククク……俺相手では恥ずかしがりもしないのがつまらなかつたところだ。アツロウを連れてきて正解だったな」

「もういいだろ。一週間の約束だし」

そう言いきってファアの耳をむしり取り、安全ピンで留めてあったらしい尻尾を外してソファアに投げだした。

ナオヤが一瞬眉をしかめてから、すつと唇を引きあげたのをアツロウは見逃さなかった。緊張して身構えたが、意外にも何も言わずにキッチンへ向かっただけだった。

「あれ？ ご飯の用意してくれるのか？」

「どうせ後少しだろう。お前達適当に話でもしていろ」

それから食事の時間まで互いの近況を話した。去年留年した夕夜とは学年が違ってしまい、卒業を控えて三年生はもうあまり登校しない時期な事もあって積もる話はたくさんあった。しばらくして夕食が出来上がり、ナオヤも交えて三人で食卓を囲んだ。「アツロウがうちでこうやってご飯食べるの初めてじゃないか？」

「そういえばそうだな」

二人共と親しいわりに、三人で行動した事は殆ど無い。

「またちよくちよく遊びに来いよ」

「おう。ユーヤもさ、今度暇な時にでもうちに来るか？」

「うん、行く」

以前のように親しく遊ぶ約束をした。その間ナオヤはずつと黙っていたが、食後に突然口を開いた。

「研究所への内々定を保留にしたそうだな」

その一言でアツロウは憂鬱だった理由を思いだした。気まづい思いを覚えてナオヤを見ると、彼は少し不愉快そうに眉をひそめていた。

「どういうつもりだ。お前はもう悪魔とは関わらずに生きていくつもりか？」

「ナオヤさん……オレは、その」

「やめるよナオヤ。別に今そんな話しなくなっただいいだろ。そうだ、テレビ見よう」

無理矢理話を終わらせようとして夕夜がテレビをつける。

『……次のニュースです。昨年成立した新エネルギー法の細則改訂に関して政府は……』

たまたまつけたチャンネルは、とてもタイムミングが悪かった。焦って話題とチャンネルを変えようとする夕夜を制してアツロウは口を開いた。

「新エネルギー……政府は何をするつもりなんです